

# 「第二言語学習者の自然発話に対する 日本語母語話者の聴覚印象」 —ある中国語母語話者(上級)の自然発話において—

山岸 智子

## 要 旨

中国語を母語とする日本語学習者(上級)1名の自然発話に対する日本語母語話者の聴覚印象を6ヶ月間調査した結果、個々に不自然な長さの音節があっても、ポーズの適切な使い方や大きなリズム単位の習得により、発話全体の聴覚印象が良くなる傾向が見られた。また聞き手が話者の発話内容を理解しにくいと感じる要因としてアクセント、イントネーション、速さ、ポーズ、フィラー、繰り返し、文と文との結びつき、一つの単語に固執することなどが考えられる。

【キーワード】聴覚印象、不自然な長さの音節、ポーズ、意味のまとまり

## 1. はじめに

### 1.1 第二言語学習者への音声教育の必要性

第二言語として日本語を学ぶ人たちは部分的な発音や個々の文だけでなく、発話全体のバランスを調整することを学ぶ必要がある。

### 1.2 本研究の目的

本稿の目的は音声教育により自然発話における学習者の日本語リズムの改善をはかり、それに対する日本語母語話者の聴覚印象を調査することである。

### 1.3 本研究における日本語リズム

日本語リズムは基本において等時的な長さで繰り返されるとしても、実際は音節の長さが異なって現れ、聞き手は進行中のリズムの調整と判断する場合、不自然とみなさず受け入れる。このことから本稿では聞き手にとって自然な日本語リズムを考える。

### 1.4 ポーズのリズムへの作用

ポーズはリズムを整える大切な働きがある。学習者たちの発話では不適切な箇所にポーズが置かれたり、ポーズが多すぎたりして、本来のリズムが分断され、聞き手は話の内容を理解しにくくなる。

### 1.5 先行研究

日本語リズムを考察する上では別宮貞徳(1977)、土岐哲(1995)、鹿島央(1999)、小熊利江(2002)、音声教育の上では土岐哲(1995)、河野守男(1998)、鶴見千鶴子(1998)を参考にした。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査対象者(学習者)と調査・分析方法

調査対象者は中国語母語話者(江蘇省)の女性(30代)で、調査期間中(6ヶ月)にタスク①(2003.1.23)⇒音声教育Ⅰ⇒タスク②(2003.2.7)⇒音声教育Ⅱ⇒タスク③(2003.3.10)⇒音声教育Ⅲ⇒タスク④(2003.6.12)という手順で、3段階の音声教育と同じタスク(学習者が4枚の絵を見て説明する)を4回実行した。学習者には週1回(90分)の日本語学習の中で毎回5～10分音声教育を行った。

学習者のタスクにおける自然発話は、DAT テープレコーダ(SONY: TCD-D100)により録音し、その音声資料を12人の日本語母語話者が聞いて文字化したスクリプトに「長さが不自然と感じた音節」をチェックした。日本語母語話者(12人)は男性4名(30代1名、20代1名、10代2名)、女性8名(50代1名、40代1名、30代2名、20代4名)で、12人のうち6人は音韻、音声の知識がある者である。自然発話では意味が通じないほどでなければそのまま聞き手の聴覚印象になると考え、聴取判断者が音声資料を聞いたのは1回である。また音韻、音声の知識のない者が判断に迷わないように「長さが不自然と感じた音節」という言葉で依頼した。尚、先入観を防ぐためにタスク(4回)の音声資料を聞く順番を変えた。また、タスク(4回)における学習者の発話全体に対する印象を、聴取者に聞き取り調査した。

## 2.2 音声教育内容

### (1) 音声教育Ⅰ(音節の長さへの注意)

週 1 回(5~10 分)×2

### (2) 音声教育Ⅱ (2 モーラフットの音読練習)

2 回×(週 1 回×3)(計 6 回)

学習者が音読する練習を行った。文には 2 モーラフットの区切りを入れ、文頭から順に\*短音節 2 つずつ区切るが、\*長音節を優先し、意味の区切れにより短音節 1 つになる場合もある。

\*短音節:母音, 子音+母音, 子音+半母音+母音

\*長音節:短音節+促音, 短音節+長母音, 短音節+撥音, 短音節+(ai, oi, ui の i)

- おい|そが|しい|とこ|ろ|すみ|ま|せん
- おさ|きに|失|礼|しま|す
- どう|ぞ|お|大|事に
- わた|しに|とっ|て|日|本|語は|むず|か|しい|です
- 中|国|に|か|えっ|て|貿|易|会|社で|し|ご|とを|しま|す
- 小|さい|こど|もた|ちが|バス|ケット|ボ|ールを|して|いま|す
- 大|きい|こど|もた|ちが|マラ|ソン|を|する|とこ|ろで|す
- たく|さん|の|こど|もた|ちが|がっ|こう|にか|よっ|てい|ます
- ある|画家|が|絵を|かい|てい|ます
- ヨー|ロッパ|風|の|建|物|が|あり|ます
- 町|の|中|心|の|とこ|ろで|けっ|こん|式|が|おこ|なわ|れま|した
- ひっ|こし|を|して|いる|人|たち|は|とて|も|いそ|がし|そう|です

### (3) 音声教育Ⅲ(アクセント,ポーズ,「同一リズムの及ぶ範囲」) 1 回(5~10 分)×7

a. 学習者は日本語のアクセントが正しく実現されないことが多いため、\*テキストにより学習者が理解できる範囲で日本語のアクセント核、アクセントの型を学習した。

\*田中真一・窪田晴夫『日本語の発音教室 理論と演習』

- ポーズは話者のリズムのたて直し、聞き手の理解に大きな役割を果たす。学習者にポーズの重要性を伝え、適切な場所でポーズを入れることを伝えた。
- 「同一リズムの及ぶ範囲」(土岐 1995), 「人間は 7±2 音節ぐらゐまでなら一気にまとめて覚える」(河野 1998)ことから「7~9 音節で意味のまとまりがあれば一気に発話する」ことを伝えた。

## 3. 調査結果

### 3.1 自然発話における学習者の日本語リズム

タスク(4 回)の音声資料を聞いた 12 人の日本語母語話者が「長さが不自然と感じた音節」を判断した。

#### (4) 不自然な長さで判断された音節数(促音, 長音, 撥音)の割合

(分母は各発話中の促音数, 長音数, 撥音数, 分子は聴取者が不自然な長さで判断した各促音数, 長音数, 撥音数)

表 1. 不自然な長さで判断された音節数の割合

	タスク①	タスク②	タスク③	タスク④
促音	6/9 (67%)	4/9 (44%)	3/8 (38%)	4/9 (44%)
長音	1/9 (11%)	2/17 (12%)	3/14 (21%)	1/9 (11%)
撥音	0/11 (0%)	1/11 (9%)	0/9 (0%)	0/5 (0%)

表 1 より, 音声教育終了後, 不自然さを指摘される促音数の割合は低下したが, 解決には至らず, 指摘される長音数の割合も変化がない。撥音はタスク②で 1 例指摘されたのみである。

#### (5) 長さが不自然と判断された促音が入って聞こえる音節数, 短母音の音節数

表 2. 長さが不自然と判断された音節

\*: 促音が入って聞こえる

	タスク①	タスク②	タスク③	タスク④
促音が入る*	0	2	2	2
短母音の長さ	1	2	0	0

表 2 から不要な促音が入って聞こえる音節数は少ないが, 音声教育による成果は見られなかった。短母音の伸長は長い自然発話であるタスク①②で非常に頻繁に起こったが, 聴取者はそのほとんどを不自然とは判断せず, タスク①では 1 例(「…のところに」2 人), タスク②では 2 例(「つうきん」3 人, 「ヨーロッパ風」6 人)指摘されたのみである。「ヨーロッパ風」は日本語母語話者なら伸長しそうに無い音節であるため半数の聴取者が不自然と感じたと考えられる。

### 3.2 学習者の自然発話に対する聴取者の印象

学習者の発話タスク①~④に対する印象を日本語母語話者に尋ねた。(稿末資料 1, 表 3 参照)

表 3 よりタスク①では, 11 人中 9 人が何らかの聞きづらさ, 発話内容が理解しにくいことを伝えている。その原因として, アクセント, イントネーション, 速さ(遅いこと), ポーズ(数, 長さ, 位置),

繰り返し、文と文との結びつき、一つの単語に固執するなどである。しかし、これらは絶対的なものではなく、11人中2人は「自分のペースで話していて長さ、短さ、速さは気にならない」「ゆっくりで発音がきれい」と評価した。

タスク②では11人中2人がポーズ、フィラーによる聞きづらさをあげ、1人は①とほとんど変わらないという印象を受けた。しかし11人中5人が「流暢」「説明がわかりやすい」「スピードが速くなってイメージしやすくなった」など①より良くなったと感じている。

タスク③では11人中2人がリズム、促音の問題が気になっているが、11人中5人が、速くなったスピード、言葉や文のまとまりがある、余計な言葉が入らないなどの理由で発話内容をイメージしやすく、風景を違和感無く思い描けたと良い評価を示し、「一番聞きやすい」と答えた者もいた。

そして11人中9人の聴取者が促音、イントネーション、外国人口調などの問題点をあげながらもタスク④の発話を全体としては最も良いと評価した。

### 3.3 音声教育による効果

固定した文を2モーラフットの規則的なリズムで音読し、体感的に身に付けることによって、言い直しやフィラーの入る余地が少なくなり、また余計な言葉も入らなくなると考えられる。当然、ポーズの入る位置も決まってくる上、不自然に長いポーズもリズムが途切れるため排除されると考えられる。従って意味のまとまりが形成され、聞き手には音声教育Ⅱ(2モーラフットの音読練習)後であるタスク③の発話内容が理解しやすくなったと思われる。そして11人中9人が、リズムを初め音声上の問題点を挙げながらも、タスク④の発話を最も良いと評価した。このことから、音声教育Ⅲで行ったポーズの重要性や適切な使い方の指導、連文節や意味のまとまりを一気に発話するという方法が有効であったと考えられる。

### 4. 調査の問題点と今後の課題

第一に、調査対象者がひとりであったことである。次回は複数の被験者によって調査したい。  
第二に、アクセントの改善による日本語リズムの変化について調査が及ばなかった。  
第三に、今回の調査では音声・音韻の知識がある者とならない者の判断結果には特に明確な差異はみられな

かったが、次回は各聴取判断者についても詳しい調査を行い、聴取判断の差についても考察する。

### 5. まとめと考察

音声教育による日本語リズムの変化をみるために自然発話形態のタスク(4回)を実行し、日本語母語話者の聴取判断の結果から考察をまとめた。

(6) 日本語母語話者に近い自然な日本語リズムの習得には、音節の持続時間の感覚をつかむだけでなく、さらに大きなリズム単位の習得が必要であるが、各音節の、殊に特殊拍の長さがうまく実現できていなくても連文節や意味のまとまりから成るリズムについて指導し、ポーズの重要性や適切な使い方を学習者に伝えることにより、個々の音節の長さに問題があっても発話全体の印象は良くなる傾向がある。  
(7) a. 自発性の高い自然発話では、話者が考えながら話している状況にある場合、聞き手はそれを考慮し、音節が通常より伸長しても不自然とはみなさない場合が多いと考えられる。

b. 自然発話形態では、(7a)に述べたように、音節の伸長が多少あっても不自然と感じないことがある。ただし、第二言語学習者の場合、日本語話者が伸長しないような音節で伸長すると、不自然とみなされる場合がある。

### 引用文献・参考文献

- 岩田礼(2001)「中国語の声調とアクセント」『音声研究』第5巻第1号  
小熊利江(2002)「学習者の自然発話に見られる日本語リズムの特徴」『言語文化と日本語教育』第24号  
鹿島央・橋本慎吾(2000)「日本語リズムの語レベルでの特徴について—北京語話者の場合—」『日本語・日本文化論集』08号  
河野守男(1998)「モーラ、音節、リズムの心理言語学的考察」『音声研究』第2巻第1号  
窪田晴夫(1998)「モーラと音節の普遍性」『音声研究』第2巻第1号  
杉藤美代子(1989)「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育』  
田中真一・窪田晴夫(1999)『日本語の発音教室—理論と練習—』(くろしお出版)  
鶴見千津子(1998)「日本語の読解における音読・黙読の比較研究—韓国語母語話者におけるアンケート調査の結果から—」『言語文化と日本語教育』第15号  
土岐哲(1995)「日本語のリズムに関わる基礎的考察とその応用」『阪大日本語研究』第7号  
服部四郎(1951)『音声学』(岩波書店)

稿末資料 1

\*聴取者に音節の長さに注意して聴くように依頼したので、全体の話し方についてはわからないと答えた者(1名)がいた。

表3 タスク①～④の音声資料を聞いた聴取者の印象

聴者	タスク①	タスク②	タスク③	タスク④
女性 (50代)	わからない単語に固執するので前後がわかりにくい。外国人が話している感じがする。日本語の表現としておかしいものが多い。	つまると、「たぶん」「あるー」などの口癖が気になる。おくべきところではない箇所にポーズをおいている。	促音が全体的に気になる。	最も上手。だいぶ上手になった。 [d][l]の発音が気になる。
女性 (40代)	言葉は入ってくるが、情景、イメージが浮かばない。間が空きすぎて何かよくわからない。	印象は①と変わらない。情景は浮かばない。	特になし	③も同じくらいいいが④の方がよい。全体として話の内容が入りやすくなった。
男性 (30代)	全体像が捉えにくい。文と文との結びつきが悪く、まとまりがわかりにくい。	流暢な感じ、説明もわかり易い。上手ではない。	リズムの乱れが個々にも全体にもある。	最も良い。リズム(促音)の間違いはあるが全体的にまとまっている。
女性 (30代)	自分のペースで話しているので長さ、短さ、速さは気にならない。	前半は①より悪い感じ、ひっかかる。後半は①より少し上手。	余計な言葉が入っていない。	一番良い。
女性 (30代)	イントネーションの上昇、下降が気になる。	特になし	特になし	一番良い。単語がぶつ切れでなくなって、イントネーションのうねりが少なくなった。
男性 (20代)	イントネーション、特にアクセントの間違いが気になる。	ポーズが多く、ポーズの位置が日本語母語話者と違う。	特になし	最も良い。話の内容が入りやすく、イントネーションは発話としては普通。
女性 (20代)	文章の構造や単語を考えながら話しているためか、間が長く、繰り返しが多い。話している速さが遅いのでイメージを思い浮かべるのが難しい。	①よりスピードは速いのでイメージしやすくなった。	言葉にまとまりが出てきて聞き取り易くイメージしやすい。	一番良い。あまり違和感を感じなかった。
女性 (20代)	考えながらゆっくり話していて、発音はきれいな。絵の風景は漠然と想像できる。	①よりは風景の想像が容易。	風景を違和感無く思い描けた。	一番良い。風景の全体像と細部がバランスよく伝えられた。
女性 (20代)	話者が内容をわかっている時はすんなりとしたイントネーションだが、わからないと一つ一つの単語を発音し、イントネーションがおかしくなっている。	①より聞きやすい。長音がしっかりと伸ばせていた。	かなり上手に発音できており、文のまとまりが理解できる。	特になし
男性 (10代)	ゆっくり過ぎて内容がわかりにくい。	特になし	一番聞きやすい。スピードが少し速くなった。	特になし
男性 (10代)	上がること(上昇調)が多くて気になる。「し」の発音が「さすせそ」の発音。	特になし	特になし	一番上手。外国人口調は変わらず上がる人が多い。言葉ははっきりしている。